

1 目指す学校像

- 教育の保障と学力の向上。
- 内面（心）へのアプローチ。
- 日常のリズムや風を届ける。

2 本年度の教育目標

- 1 学ぶ楽しさを体感させ、学ぶことによって生まれる自信を大切にする。
- 2 関係機関との連携を強化する。
- 3 実態や発達段階に応じたキャリア教育を推進する

3 評 価

評価の基準

- A：設定した目標を十分達成できた。
- B：設定した目標に対し、ほぼ達成でき、次年度の課題が明確になった。
- C：設定した目標に対し、成果が不十分であり、課題が残った。
- D：設定した目標に対し、ほとんど達成できなかった。

項 目	昨年度の課題	本年度の目標	目標達成のための手だて	自 己 評 価		学校関係者評価		今後の課題
1 学ぶ楽しさを体感させ、学ぶことによって生まれる自信を大切にする	・児童生徒理解を推進する中で、児童生徒の抱える課題が病気によるストレスなのか、児童生徒の本来の性質なのか不明なケースがあった。 ・教職員の授業力向上のために、同じ教科・学部による研究授業などが行いにくい状況がある。	・病弱教育における発達障害の支援の在り方について研究する。 ・教職員は常に探究心を持って教材研究を行う。 ・テレビ会議システムについてその効用を確認する。	・発達障害に関しては講師を招へい（年間3回予定）し、その支援の在り方を通常の授業の中で展開できるようにしていく。 ・教職員それぞれが自分自身の授業力向上のための自己目標を立て、実践していく。 ・テレビ会議システムについて、講師を招へい（年間1回予定）し、可能な限り実践できるようにする。	・講師を招いて発達障害についての大きな研修ができた。しかし、在籍する児童生徒がいなかったため、実際の支援のあり方について授業を通じて検証することができなかった。 ・テレビ会議システムを児童に紹介することはできたが、実践したいというニーズはなかった。	B	・個に応じた授業を展開できた。 ・児童生徒が教員を信頼することで教育効果があがると思われるので、個別の支援方法を考えることが必要である。	B	・児童生徒が教員を信頼でき、より一層の教育的効果を上げるためにも、教員に相談しやすい雰囲気や場を設定したいと考える。 ・授業効果を高めるためのその児童生徒にあった方法を模索し、実践する。
2 関係機関との連携を強化する	・市町村から要請を受けて、教育相談等派遣するだけでなく、こちらから発信していく必要がある。 ・保護者への安心感を与えるためにも、より一層の病棟との連携が必要になっている。	・特別支援学校としてのセンター的機能を充実させる。 ・病棟や前籍校との連携や共通理解を密にする。	・特別支援教育についての専門性をそれぞれの教職員が磨く。 ・可能な限り、居住地校交流・支援会議等を開催する。	・児童生徒が前籍校へ帰る際に、必要に応じて支援会議を開くことができた。また定期的に医教連絡協議会・医教連絡会を開催し、共通理解をはかることができた。 ・手立ては達成したが、「センター的機能の充実」という点には工夫の余地があると考ええる。	B	・今まで通り支援会議等開催し、前籍校との連携をとっていく必要がある。	B	・センター的機能の充実のため、専門性向上を目的とした研修会や講演会を開く場合には、本校の教職員や南国市の教職員にも参加を呼び掛けるようにしたい。
3 実態や発達段階に応じたキャリア教育を推進する	・児童生徒の病状等により、課外活動や自立活動を計画的に実施することが難しい。	・課外活動はより多くの児童生徒が参加できるよう工夫する。 ・ボランティア等を活用して、内容に広がりを持たせる。 ・スクールプランニング事業を活用して、子どもたちが自分の将来について考えるきっかけとする。	・課外活動では、幅広い年齢の子どもたちを対象とした活動を行ったり、運動等を取り入れた中学生を対象とした活動を教室にて行ったりする。 ・マジックショーや読み聞かせなど、児童生徒に笑い等の情緒的な潤いができるよう展開する。 ・実施可能なケースでの「交流及び共同学習」の計画的な実施する。 ・児童生徒のあこがれの職業人を招へい、（年間1回）することにより、正しい職業観や近い将来の自分の進路などを考えるきっかけとしていく。	・スクールプランニング事業や課外活動は、外部講師の力を活用して多彩な取り組みができた。自分の将来を考えるきっかけとなったことや、感性に訴える活動等ができた。	A	・自分の将来を考えるきっかけとなる講演会などが開催できた。 ・外部講師の力を借り、児童生徒のみならず他の入院患者の癒しの場となる活動ができた。	A	・児童生徒が自分の病気や治療・療養について理解し、前籍校にもどった後も自覚した生活ができるようになるための学習を、なお一層充実させたい。